

## 【7】立太子（副王位）年齢

[0] 立太子（副王位）年齢について調査する。中村元博士は、『原始仏教の成立』（中村元選集〔決定版〕第14巻 春秋社 1992年11月）の「〔付編〕原始仏教聖典成立史研究の基準について」（p.655）において、「副王（*uparāja*）という呼称は、『パーニニ文典』のガナパータ（*gaṇapāṭha*）に言及されるけれども、インドの一般文献にはたえて現われない呼称である。これは現存資料によって見るかぎり、マウリヤ王朝特有の職名であった。ところで『ジャータカ』の散文のうちにはたびたび現われるから、『ジャータカ』の散文がマウリヤ王朝時代あるいはそれ以後のものであることは明らかである」とされている。確かにA文献にはこれに相当する資料はなくB文献のみである。しかもB文献にしてもはっきりとした年齢を記す資料はわずかに2例のみである。

[1] 後期原始仏教聖典（B文献）に現れる2件の立太子（副王）年齢記事は以下のものである<sup>(1)</sup>。

(1) 遊学年齢資料の〈1〉の *Jātaka 050 Dummedha-j.* のブラフマダッタ・クマールは、①16歳《遊学》⇒②《学業の修了》⇒③《副王》のライフステージを経、16歳に修学期間を加味した年齢であろうが、本項の資料としてカウントしていない。

〈1〉（太子）/男/クシャトリヤ（太子）/15歳

『法句譬喻経』（大正04 p.606中）：昔有國王治行正法民慕其化無有太子以爲愁憂。佛來入國便出觀尊。聽經歡欣即受五戒。一心奉敬唯願有子。晝夜精進三時不懈。有一給使其年十一常爲王使。忠信奉法不失威儀。謙卑忍辱精進一心學誦經偈。知時先起已辦香火。數年之中精進如是不以爲勞。卒得重病遂致無常。其神來還爲王作子。乳哺長大至年十五立爲太子。父王命終襲代爲王。

〈2〉王子（弟）/男/クシャトリヤ（王子）/16歳

*Jātaka 416 Parantapa-j.* (vol.III p.414) : [主分] 菩薩はブラフマダッタ王の妃の胎に宿った。成長して、タッカシラーであらゆる学問を修め、動物の鳴き声を聞き分ける呪文を学んだ。バーラーナシーに戻ると父王は菩薩を副王位につかせた。しかし王は菩薩を殺させようと望んでいたため、会うことをしなかった。ある時、敵の王に町を包囲されたとき、副王は町を空っぽにし軍隊を連れて去ってしまった。王は王妃と司祭とパラントパという召使いを連れて、夜中に変装して逃れ、森に入った。副王は王が逃げたと知って、町に入って戦い、敵を破って王位についた。折しも森に入った王妃は妊った。ところが召使いのパラントパと不義を行なったので、王に知られることを恐れて、パラントパに王を殺させた。その後、少年は成長して16歳 (*soḷasavassa*) になった時、バラモンから現在の王は彼の父を殺して王になったかつての使用人であることを教えられた。王子は復讐を決意し、父の敵を討つと司祭等とともに兄（菩薩）のいるバーラーナシーに着いた。王子は兄の王によって副王の位を授けられた。

[2] 今までの例にしたがって、立太子（副王位）年齢のA文献・B文献資料を度数分布

表にしてみると以下のようなになる。ただし資料数が2例しかないのであまり意味はない。

《立太子（副王位）年齢》

年齢	A. 原始仏典				B. 後期仏典				総計
	パーリ		漢訳		<i>Jātaka,</i> <i>Apadāna</i>		本縁部・ 根本有部律		
	男	女	男	女	男	女	男	女	
15							1		1
16					1				1
平均					16		15		15.5
最頻値									
総計					1		1		2

ただし *Jātaka* 519 (vol.5 p.088) では、ソッティソーナ王子は成年に達したときに副王の位に就いたとされており、ジャータカが成人に達したというのは16歳を示すことが多いから、これも資料に加えてもよいであろう。そうすると平均値は15.7歳ということになる。なお標本が小さすぎるので、ヒストグラムにはしなかった。

[3] 中村元博士が言われるとおりにこれがマウリヤ王朝特有の職名であったかどうかはともかくとして、これを学業の修了や就業に読み替えることもできるであろう。あるいははじめから就業の中で処理すべきであったかも知れない。